

季寄
註解

改正月令博物筌

三月部

三

0-58
俳諧資料カード

年代

編者
(筆者)

書名

備考

3

(改)

(下垣内蔵)

三月 目錄

色目板

七丁

七丁

△曲水宴

七丁

△巡水宴會
△巴の字水

△雛遊

△ひな祭
△たてひな
△ひなあがり

△汐干

九丁
三日祝儀文

△石山祭

十丁
△粟津祭

△土佐海硯取

十丁
△一乗寺祭

△修學寺祭

十丁
△石清水臨時祭

△巖城大念佛

十丁
△水尾祭

△高尾法花會

十三丁
△金毘羅會式

△稻荷明神御出

十一丁
△安樂花

△吉野會式

十二丁
△善導忌

△敷天台礼拝講

十四丁
△鎮花祭

△善導御忌

十三丁
△壬生寺大念佛

△千本大念佛

十五丁
△祇一切經會

△勸學會

十三丁
△梅若祭

日九 日十 日九

日九十 日七十

△江州比良祭

十六丁
無縁經修行

△ひんぎりの神事

十八丁
△人丸祭

△御身拭

十九丁
△御影供

△高尾女詣

二十丁
△爐閉

三月令

此部小八日のさびきありしる
三月一ヶ月のさびきとあるす

△順峯入

二十五丁
△花の縁

△小弓引

二十六丁
△男女衣服式

時衣

△さくら衣
△さくら重
△山吹衣
△はくじ衣

△寒食

二十七丁

三月令

此部小の三月の時候小のり
さびきありしる

△暮春

△春限
△春の湊

△三月尽

△忘霜
△名残のね

三月草木

此部小の三月一ヶ月乃らき
木とありしる

△花

△能偕正花
△能偕非正花
△大畧

△庭探

△花見
△花田
△山探
△家さくら
△花笠
△さくらゆき

△三月菜 野△若菰 野△

△部 △胡蔥 野△

△櫻のり 野△茶摘 三野△

△かご茶 野△

△生類

此部小の三月二月り多く
の生りのとしらす

△呼子鳥 野△麥鶉 野△

△引残る鶴 野△雲小入鳥 野△

△鳩 野△蛤小鳥 野△

△櫻貝 △櫻鯛 △柳△

△若鮎 △小鮎 △上り梁 野△

△青饅 野△

△三必用

此部小の風雨の占の破戦の
向方の日取の吉凶の他行の心

得の作事の解の料理献立の法食
物の好悪等其の品々あつむ九日の定たる
事ハロの日今の部はあり爰ハ日の定する
るる三月下月の要用のことなあつむ

三月日終

三月之部

△印ハ季と持ッ
物小用るりのく



今月百花咲やと
るび遊賞する小
たぐり人間
の故障あるハ
ハ風雨明日の
事をもろが
ひまあつ山
野よあそびて
情そのびべ

○五陽ハ三月の異名○沃天夫ハ五陽
長トク一陰消する意夫ハ去るの義之

異名 △季春 △中姑 △春晩 △襖月
△蠶月 △暮春 △殿春 △五陽

鶯時竹秋 春末 春杪 残春 春
婦姑洗 △弥生 △花見月 △櫻月

春惜一み月 さつあふ月
花津月 夢見月 志めいろ月

異名註 ○季春ハと名のたる
あり○中姑ハあひ

とるく。襖月ハ上己のそと
する月されはひく。蠶月ハ

かゞと作る月といふ事あり。暮
春いたるのとき。殿春いたるは志
んづりと云意。五陽の註あり
鶯時いふをいふのなく時。竹秋
たんかの時かれはく。春末いた
るのとき多あり。春杪いたる乃
はく。残春のころ多ひる
といふあり。春歸いたるが
層る。姑洗の姑い古あり洗を
あはれ入万物皆あはれと去りて
あはれしくあはれ義あり。弥生
の春の陽氣よくて萌へ出る
草もこの月よく生ひさうん
る。いづれやあはれ月といふも
してやよといふはあはれ

歌 秘藏 三月の月

あはれ入るもあはれはくあはれあり
さうんさうんはくあはれあり

莫傳 花津月

花は月をさうん後の名のあはれ

ひまゝくまれの社おれぬ

藏王 さうん月

たべて今さうんといふは梯月
さうんありあはれ方のはく

莫傳 夢見月

さうんさうんあはれの山乃あはれ月
嵐のさうんあはれのさうんあはれ

藏王 花見月

うとくあはれあはれあはれのあはれ月
あはれあはれあはれあはれのあはれ

節。立春。七十二候。草木七十二候
。昼夜長短。日出入等左に記す

此項萬物類



桐華薔薇此ごろさくあり一書ふ
玄鳥いづるとあり木筆いこぞ

あり虹始て見ゆらひはじのころ事
あり是寒氣ふらつて雨氣あり

とつへる虹のいろと不成りく虹の
雨氣小日の映じてころあり一書ふ

鴻雁北とくあり北飯る節占候
○此節より雪あり

雨ありてむらよりま入暗るまは
早蟄収る昼より後暗るまは

晩蚕収る○風東北より吹バ月
未よ至て米の價貴し東南

より吹ハ中旬小米價貴しと
ども月末に至て賤し西南

吹バ月末よ米價貴し西北
あけむ中旬よ米價貴し

節花期知 年の寒暖ふらつと
いふも此頃桃の盛

あり伏見桃山旗津稻田其外
凡此前後ふらつ櫻と一重ある皆

さくあり彼岸櫻あむ殊更早し
名木八重等ハ遅し中穀雨の取小陰



今日辰の時雲のゆく方角を以て年中のこととあむ
清明日偶題 王世貞

穠李天桃名聞新 李ト桃ト選
ニ名花ヲ爭

テ新ニ傷心眼底上墳人ハ庶
開ケリ

人墓所ノ掃除ニ行ツテ見レハ
無常ヲ感ジテ心イタマシキトシ

生憎介子成寒食破損風光下
日春ヲ怨ムルトイフモヤハリ子
推ヲアハレムナリ

介子推トイハ
唐ノ忠臣ナリ

妙術

去樹虫法

今夜子の刻樹木の上をくぐりて

くぐりてをくぐりけり生せむ

碑諸虫法

今日戌の方け上土

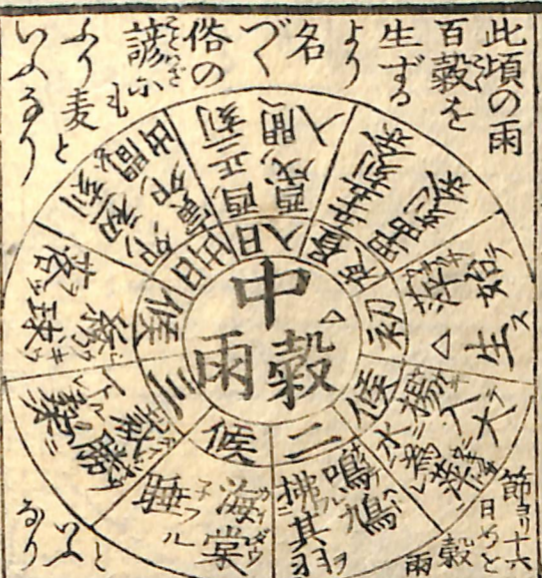
を取りて狗の毛と煎ドて泥土

とふく屋内門戸の孔穴を塗

まの蛇其外一切の虫家の内ふ今

事か一月令廣義ふ出く

中 七十二候。草木七十二候。日ノ出入。昼夜長短。左ふありす



萍始て生の頃日池の中陽氣あり 蒸とて草生と一書小葭とも芦

ともあり揚萍と成鳩鳴羽拂も 春の陽候あり一書小第二候よ

牡丹華さくとあり裁勝とひ百舌 あり桑小下ねえ綉球の櫻桃あり

妙術 治熱病法 今日茶炒て蔵め置と此

茶と煎ト吞めバ痰嗽百病 一切の熱病を治さるなり

花盛期 吉野山母ても山上を 遅く山下の早いと

へども中より七八日前と盛守京 智恩院根津就鷲尾山とて八重

九重の名木ハ此頃より御室鞍 馬八幡等ハ今五七日も遅

八十八夜 立春の節よりハ 十八日めぬあり

俗説ハ名残の霜くひん凡春 の氣終つて夏れ火氣に变化す 冬の節きたる霜も此頃より ありざるやいふるべし此とき

霜降まば草木のころを人ぞ損をかひて其ふせだをさぶく

○綿をさぶくハ此前後より八十八夜の前者四月五日までさぶくあり

土用

一年四季ハ土用を合せて一季七十二日として三百

六十日あり土用の中央まで信守り四季春木夏火秋金冬水の間ハ配して十八日三分づまり十九日の事あはれども刻數よていやさう十

八日三分あり三月節ふ入てより十三日め土用の入り夏秋冬同是土用の内西北より

土用天氣

聞さ一日の中雨多

然まども北風吹出せば晴る南風いさぶて雨あり○雨ありつくとれも北風あき出せば雨晴ると又ども三四日の中又雨とりよなとも東風よそとあく時ハ晴はぐく土用の常の天氣と異く

日令

三月日の定より事支の定よりあはれ記す

午ノ日

菜子

△桑蠶△蚕今日蚕を初て菜小付るあり

上ノ日

京

△松尾明神御出七日の間御旅ふて法樂の能あり

朔日

不成

天氣

晴天ハ五穀ふとろりかび

あつひハ人病事多し○大風吹ハ病多く草木虫多し○北風吹て朝より米の時ふつるまで止まれば米價貴し

江戸

紅毛人加毗丹筆二日

天氣

今日雨あれば大坂の天王寺經堂の經供養の

刻ぶ三

養生

今日夫婦の占

今日風よハ梨樹ハ虫は守候雨ふれば菜の葉あし米

柳づら今日柳と桃花酒今日

酒小和して吞と月令廣義のあま
とと其能よく瀉下す殊更千葉

花を服とれを血こ出てやまんと
本草のあれが吞べうばたぐてし

かそへてかざらん事をも風流は
夫木 公朝

天の川と一べの極や笑わらん
をさへ花のさきに多しある

狂狂人のさげうく斗りりんを
とをされたるり地酒立圃

草餅蓬餅 菱の餅 母子餅
煎麴の汁と取餅詰餅

と名づく今日食とる事唐も
あり本朝も文徳実録小とこ

草の餅を用る事あれが古へ
是を用ひしなりよし餅餅

物されば中世より用るともさ
非非常の末をめぐん仲の條嵐雪

狂狂か見もあつとふと難さぬの
羨のりらぬ糸らぬの好

詞も粉も毒も入て梓とるり
はくももらんぐさひ一札ら行嵐

己日拔氷辺病を除くことと
是周の世もさしを魏の時

より三日と用る事いさうさう
己の日と用る事い当月辰の月

さまじび己を除日とさる本朝
も古代の己の日と用る雄略

帝元年上己日清苑は御幸あ
ア一事日本紀み出さう

非非おあふた己の日たうへる宗因
おまもむありと己の

日たうへる嵐方 須磨御
光源氏須磨の浦小左遷の時

陰陽師は仰せ御抜しなま

つり舟ふんぐとほろり **曲水**

てみぎをし事あり 曲水の

曲水 巡水宴會 周漢の世の後 盃を流してをり

の事多く出されば唐も久し 曲水の

さして流すべし川の辺り 曲水の

して流水小杯を浮へ其杯の我 曲水の

が前と過ぎる先に詩を作りて後 曲水の

杯ととり香する事之本朝のみ 曲水の

頭宗帝の御宇より始まれり 曲水の

哥 草庵 頃阿

るる初花の表宴まで 曲水の

まごころのそらかたもあがさ 曲水の

夫木 後京極摂政

ちる花をさく人の園居れ 曲水の

ほるふれぶ居まらさうづ 曲水の

同 定家

かう人のあはれつゝ 曲水の

ほよまごころ 曲水の

詞 みづの

なま 曲水の

つり舟ふんぐとほろり **曲水**

てみぎをし事あり 曲水の

曲水 巡水宴會 周漢の世の後 盃を流してをり

の事多く出されば唐も久し 曲水の

さして流すべし川の辺り 曲水の

して流水小杯を浮へ其杯の我 曲水の

が前と過ぎる先に詩を作りて後 曲水の

杯ととり香する事之本朝のみ 曲水の

頭宗帝の御宇より始まれり 曲水の

哥 草庵 頃阿

るる初花の表宴まで 曲水の

まごころのそらかたもあがさ 曲水の

夫木 後京極摂政

ちる花をさく人の園居れ 曲水の

ほるふれぶ居まらさうづ 曲水の

同 定家

かう人のあはれつゝ 曲水の

ほよまごころ 曲水の

詞 みづの

なま 曲水の

つり舟ふんぐとほろり **曲水**

てみぎをし事あり 曲水の

曲水 巡水宴會 周漢の世の後 盃を流してをり

の事多く出されば唐も久し 曲水の

さして流すべし川の辺り 曲水の

して流水小杯を浮へ其杯の我 曲水の

が前と過ぎる先に詩を作りて後 曲水の

杯ととり香する事之本朝のみ 曲水の

頭宗帝の御宇より始まれり 曲水の

哥 草庵 頃阿

るる初花の表宴まで 曲水の

まごころのそらかたもあがさ 曲水の

夫木 後京極摂政

ちる花をさく人の園居れ 曲水の

ほるふれぶ居まらさうづ 曲水の

同 定家

かう人のあはれつゝ 曲水の

ほよまごころ 曲水の

詞 みづの

なま 曲水の

水流今日志ノ行サキノ友父子ノ家
桃花ハ桃花ノ咲ク岸バタニアリテ 澄川水カスクニ門前デ流テ凡所ナルツ

詩 曲水五字對句

同上

畫笈ハキシクカレホジヨラ 浦叙コジニユシニユキイラ 故事ニシテ 修ニシテ 春ニシテ 禊ニシテ

春服フクニツタイレニ 滿汀洲ニシテ 新宮ニシテ 展ニシテ 豫ニシテ 遊ニシテ

詩 同七字對句

詩 礎

烟エンカイ 開カキ 蘭ラン 葉エフ 香カウ 風フウ 起ヨリ 白鳥ハクテウ 飛トコ

岸キシヤン 夾サシ 桃トウ 花ハナ 錦キン 浪ナミ 生ナマ 引ヒク 飛ヒキ 觴ヤウ

永和ユウワ 春ハル 色イロ 千チ 年ネン 在アリ 舞マヒ 鳳ホウ 樓ロウ

曲キョク 水スイ 鄉キョウ 心シン 万マン 里リ 餘ヨ 泛ヘン 觴ヤウ 遲チ

雜ヒルメ 遊ユウ △雜ニシテ 祭サヒ △雜ニシテ 飾シヨク △立タチ 雜ニシテ ○敬ケイ

後ノ 具ク 身ミ 体タマシ 与ト 女メ 子コ 雜ニシテ 以テ 撫ニ 水スイ 小コ 流リウ 凶キウ 事ジ 与ト 除ス 去ク 矣ヤ

○又マタ 雜ニシテ 以テ 鳥トリ の子ノ 物モノ 名ナ 入ル 矣ヤ
らシ 之ノ 名ナ 入ル 矣ヤ 小女コメ 是シ 之ノ 弄ウツク 也ヤ

内ウチ 守モリ の 教ウチガシ 有リ 昔イマ 常ニ 以テ 之ノ 事コト 有リ 近代キナ の 三ミ 日ニ 小コ 限リ 即ス 季キ 也ヤ 特トク 之ノ

非ヒ 小コ 盃ハシ 其ノ 角ツノ 矣ヤ 孫マコ の 飯イハ 後ノ 竹タケ 矣ヤ 婦メノ 免メ 之ノ 也ヤ 雜ニシテ の 徒タ 一ヒト 儘ニ

狂キヤウ 雜ニシテ 之ノ 世セ 活カク 也ヤ 自ミ 拘コ 矣ヤ 上ウヘ 己ミ 看ミ 花ハナ 明アキラカ 楊ヤウ 基キ

東トウ 湖コ 東トウ 畔パン 柳リウ 絲シ 長チヤウ 滿マン 苑エン 飛ヒ 花ハナ 乱ラン

夕セキヤウ 陽ヤウ 湖コ 水スイ ノ 川ケン 畔パン 二ニ 柳リウ ノ 條チョウ 長チヤウ

乱ラン ル、ヶ 何ナニ 處トコロ 後ノチ 除ス 兒コ 女メ 散サン 過カ 來キ

流リウ 水スイ 餘ヨ 金キン 香カウ 弥ニ 生シヤウ ノ 後ノチ へ 事コト ス

ムレ テ チリチリ ぐ 二ニ 家カ ニ カカ ヘル ト ホリ
スグ ル 水スイ 一ヒト テ ガ 衣イ 裳シヤウ ノ ト メ 木キ ノ
ニ ホ ヒ ウ ツ リ テ カ ホ レ リ
又 油アブ 花ハナ ト ノ 故コト 事コト ニ モ ト レ リ

詩 同 劉得仁

未ミ 敢カン 分フ 明メイ 賞シヤウ 物モノ 華カ 十ジュウ 年ネン 如ニ 見ミ 夢ム

中チュウ 花ハナ 世セ 間カン ナ 二ニ 節セツ 句ク ヤ 花ハナ 鳥トリ
ヲ 樂ラク ム ト モ ナ ク 十ジュウ 年ネン バ カ リ

ハウレイイ多クウカノト ユウシキ 遊人過盡

花ヲミルモユメノコトニ カクモニオホフ 衡門掩獨自凭欄到日斜 夕景 ヲ愛

シ流鶺ノタメニ遊ビ来ル人スギ去リツ キテワガ家ノカタオリ戸モ戸ガサレテ

尺ヒトリランニヨリ彼レコレトオモヒ メグラスウチニオホヘズ日モカタムクナリ

汐干 三日ハ海の潮太おろく

○泉州堺浦。主佐硯石取。其外諸國汐

干の處多し。爰小を畧し

夫木

家隆

あつぎの汐干はまも何さらん 汐のあまみわらく彼を

夫木

師光

伊勢の浦は死なぐな泊めて 却乃つとふ見やららん

詞 震い 春の浪やと袖風 いこころ。沖きけて。ちりこころ。内外

の濱をの神。貝ひひふ。まひのぬ 非 鏡教声抄 獲あむい戸汐干貫十

三月十日も二の後をた汐干小慶吉

親あむむ比目とさすん汐干小其角

蛤ふはまきた汐の形来る移行

初くてこそいんばと汐干小十磨

狂 狂 狂 狂 やびんめも汐干小

常楽菴 常楽菴

三日妙術

辟諸虫法 今日齋の 花を竈乃上又ハは

孫の居間小まひむむ 蟻と

ぐ 辟 辟 苦棟の花

も 花 花 葉 葉 て

臥房の下 い 登 こと

辟 こと 今日又 つ 辰の日

に 芥 芥 花 花 茶 茶 菜 菜 と 衣服

の中へ 入 事 ま

面の光沢と出す法 今日桃の花と

採 と 収 め 七月七日に 雞 雞 の 血 と 取

と 二 味 和 一 勻 へて 毎 夜 ウ ね ね

と 一 三 四 日 小 至 て 顔 色 は 出

老 ら ち も 見 ゆ かな り

狀 賀上巳之文 真對の尺牘あり

一 笔破上仕以先以孫法勇

度 修尺一 替笏 平

勝 少成少生 少成少生

安 可嘉 可嘉

修 輕激く 或人重く 均共

僅

海魚 二種 魚之仕以

供 雙魚

聊

上巳之節 仕以 上巳

祝 上除之辰

式 斗 少成少生 之 燈 儀 云

標 入 馬

尺牘 上中下書啓

供 雙魚 獻海鱗 送溪魚 上

除之辰 上巳佳日 拔楔令辰

蘭亭會日 幸標入 伏乞鑒

納 勿訝其不興

三日 踏青鞋履 唐士ノ俗 士女子野

遊スル 祈社 女巫水ニ臨ニテ 祓

福ヲ祈ルイ風 祓灑 武帝位 二即テ

俗通ニアリ 數年子ナシ平陽王良家ノ子

カ、ヘヲキ武帝ノ霸水ノ上ニ 後シ玉ヲ飯リニ立ヨリ玉ヲヤウ

ニセント漢書ニアリ其外 祓浴 金堤石壇ナド皆今日 祓セシ故

事 蘭亭 晉ノ王羲之ノ會 稽山ニテ詩人文

人ヲ集メテ酒宴ヲ催シ 禊ヲ ナセントアリ蘭亭ハ亭ノ名ニ

油花ト 唐土ニテ婦女 薺ノ 花ヲ油ニ点ジテ 祀リ

ヲナシシレ水ノ中ニ 蘸ニテ之ルニ 若 龍鳳花卉ノ狀ヲセバ 吉ヲ得ルトス

三十日 京 長講堂後白河法皇御忌
○大佛蓮華聖院開帳俗三十三名

四十日 鎮花祭 三輪・狹井・二神
△とまじつる神祇官

△まておこれりる春花のどびこ
頃疫神あきこ穢けがひやくあふよろくと

京 △善導大師御忌修行あり
△壬生寺大念佛十四日より廿四

日まて本堂の前ぞおどり念佛を
はとめもくの狂言ウケをつくす

△非声のてんなるうきを念ふ滝列
△嵯峨千本念佛。皆疫穢の遺意

五十日 京 △祇園一切経會拾芥抄出
聖護院の森熊野権現祭

△勸學會 康保年
中大内記保胤文道先達の学徒と進

めて始りる勸學院の三條の北舊の森其
跡へ近世四條太宮の西へうめるとあり

江戸 隅田川木母寺大念佛
△梅若祭 吉田少將の男人小

欺まして東海小趣と病小ひりて死を
塚小柳を植ふ今小至迄大念佛會を以て用ふ

○浅草第六天祭(下谷
稻荷祭)○浅草念佛院中

將姫法會○芝鹿島御穂
而社祭礼隔年小執行とるく

諸方 ○藝州巖島會十五日
△江州比良祭昔山門領あり故
山王を祭ら三社あり

十六日 黄姑侵種日 天氣 西南の風
ありこの日之 天気ハ旱リを

主る風烈しけまの弥早強し
唐土の人ハ是小依て錢百文を

軒の下にけて風とうらまり
風のこの錢をうどういとあり

されハ豊年とうう又強く動けが
早うて其用意ををみひかり

忌旅行 今日遠方へ行事を
一りと不慮の難いあり

無縁経修行 昨十五日より廿
一日迄檇州中山寺

觀音野崎觀音等參詣迄十八日
觀音懺法修行せしむ故なる

十不成 江戸 △浅草むん
就日 江戸 ざぐらの神事

祭礼あり年のこの義をよし
神輿本堂の遷座法會あり

八十 江戸 浅草三社権現祭
丑卯己未酉戌の

年行りあり。池上本門寺千
部修行今日より廿七日までこ

大坂 淨光寺觀音懺法
大龍寺觀音會 摩尼山

人丸御影供 明石にて修行と

昔ハ毎月今日内裏の和哥所ハ哥
の御會有リ今も和哥好ハ哥會有

九十 京 嗟哉親迎御身試ハの如來の昔
父の牛小生と歎キ佛果と得ん

為如來と試ハ衣と牛小生也 藥多是
より毎年如來と試ハ白布 參入小後

十一 諸國弘法大師御影供
大師入定の忌日ふして紀州高野

山の勿論京東寺高雄とともめ
国々一宗の寺院よ法事あり

△高尾女詣常ハ此山女禁制あり
今日をめぐりのゆかりありて參詣

群集とみハ江戸とてハ川寄大
師河原參 大坂 住吉たが

詣甚多し 大坂 みの御影

廿二 天王寺大字堂 近江 礼拜
法事音樂有 日四 講十

二百十三日修行廿四日廿五日と新礼
拜講と云叡山大衆の僑者と歎て

山王大師昇天志ありんと託宣有て冊
木黄小変ず大衆驚き法華八講を

修行し神と升 不成 山城 二の瀬
慰の奉るあり 日五 就日 山の神祭

大和 南都般若 養生 房事と
寺文殊會 戒べし

今日沐浴して身と清くして神氣とらるりに成て諸病を患へど

八升 近江 比叡山とて山王祭に用ゆる神とらるり

晦日 爐関 又炉塞としかけり茶人の炉とぬぐぐをを

茶湯の法十月より 今月晦日限りて四月朔日より 風炉をり

司 友とらるり。春の名病。非炉塞とてぬぐぐをを

京 千本引提寺念佛。堂前小普賢像の櫻あり此花乃

開くと期して念佛と執行と此花凡立春より七十五日頃咲く

月令 此部六日の定まらるる三月の亥と記す

順峯入 春大峯山上とると順の峯とて

本山より 聖護院宮御門主天台宗より 富山とて醍醐三室

院御門主真言宗より 役行者三十四歳の春葛城を経て熊野を

経て大峯と踏分けぬと順の峯入のよりとて 本山の御旧

格より 春毎小御代参順の峯入有之順へ本山よりと秋を逆

峯といふ 本山當山といぬとてけたまふ事 七月の處に記す

非大峯とて 花之縁 俗説

小三月と婚姻ふ忌むく人の或説花の淵よりとて 岸をく小多

あるといふ。詩経に 桃之夭々其葉素々之子于歸。桃の花咲く頃

女子と嫁入る事。爰と以て見るとは 婚礼に忌むく非なるべし

小弓 昔内裏して此事あり 地下に 春の遊びとす

哥林の務むる世のうれふ 妻のあまびはくこゆを 慈鎮

衣服之正式

綿入と着る袴の柳色あり

時衣

△櫻衣 表白裏赤 △櫻重 表赤裏白 △山ふきとぶるも 表赤裏白

△裏山吹

表赤裏白 △紅金比呂衣 表赤裏青

あぶのちろとふ花のうら衣

女衣服

白つえびと白ちろめん 類小水山吹櫻

川つづきと暮行ゆるのも やう金銀くを以てゑがきたる と間着のてひんどのちろめん の類さういふり又も色あはくは花のもやうけうちろめん りらぬことやういあうとも地 履ふを上着ふとゞ一 是の 上つこの式より四民是ふあへ

寒食

冬に至り百五日を清 明の節前二日といふ

此日より清明ふくろ唐土より 先祖の墓所を掃除して祭を ごと事今日と十月朔日にあり 草木初て生ずる時を以てなり志

わふ人の墓所小行て拜掃とゞ

俳を念ふいひるは子にを掃とゞ 琴扇 寒食名は炭の付る猫の殻 磧て

詩 寒食之詞

韓雄

春城無處不飛花

城下處々春花チリトベリ

寒食東風御柳斜 春風柳ノ枝ヲ吹クビイテ

景色 日暮漢官傳蠟燭 今日漢 朝ニハ

火ヲアラタメテ諸臣ニ下シ與ヘ 賜ルヲナリ日ノクレカタニ新火ヲ

点シテ禁 青煙散入五侯家位

ノ貴人カタ火ヲ賜テ オノクヤシキヘカヘル

詩 全

韋莊

滿街楊柳綠絲煙 街ノヤナギ緑 ナル絲ヲ見ガ

如ク春ガスミウツ 畫出清明二 リテウルハシキニ

月天

清明ノ天氣イサギヨ好是

隔簾花樹動ノ花樹ヲ吹キ動

影色ヨシ女郎擽乱送鞦韆中

ノ女中鞦韆ノ繩ヲ引キ

ノベテ今日ハ夕ラレアツブニ

寒食

故事

唐士ノ政年
中ノ火ヲ改ル

ニ榆柳ノ火ヲ用ユ春ハ木夏ハ

火ニ屬スル故木生火ノ義ヲ以

今日改ルナリ論語ニ燧ヲ

キツテ火ヲ改ムトアリ

子推春秋ノ時晋ノ文公ニ

賢人ノ燒失シ日ナレバト

テ三日が間火ヲタツナリ

食秦ノ人ハ寒食ト云ハズ熟

食ト呼ブ火ヲ用ヒズシテ

ヨク食物ヲ熟スルトノ義ナリ

又齊ノ人ハ冷節ト呼ビ禁煙

トモイ

杏粥束粥青精

飯青飢飯。桐楊ノ葉ヲトツテ

飯飯ヲツムレバ青ク光リアリ

コレヲ食ヘハ陽

氣ヲタスクトス

鞦韆戲半

戲彩ル繩ヲ木ニカケ架ヲ夕

テ、其上ニ坐シ立テ其繩ヲ引

ウゴカシ

アツブニ

傳燈

漢ノ世ノ政
寒食ニ火ヲ

キヨメテ日暮ニ燭燭ニ新火

ヲ点ジテ近臣等ニ賜フコト

アリコレ寵恩

拜掃唐ノ

ノ厚キナリ

年中天下ノ士庶ニ勅シテ先

祖ノ丘墓ヲ掃キキヨメテ祭

ルベシトナリソレヨリ此日ニハ

貴賤老弱群集ストイヘリ

時令

此部ノ三月の時侯

小の事とのと

君ガカヘリ玉ヲヲスリルカクシウナウ 到来ルカクシウナウ 面谷愁中

月歸ルカクシウナウ 太碯溪夢裏山ハ道中ノ山

川ヲ云旅ノモノウハ 簾前春色應ニサニ

須惜世上浮名好是間ハナゴリ 春氣色

名聞ハムダナフツ 西望ハナゴリ 鄉関腸欲

斷對君衫袖淚痕斑君ヲ送別

鄉ガ方ヲ望ミヤレバ一カタナラズ故

卿ノコヒシク君ノワカレニ衫袖モナ

三ダニシホリアハサルナリ

詩暮春五字對句 同上

啼鳥春將盡 誰知心裏恨

落花雨未晴 已過夢中春

詩全七字對句 詩礎

如流春色催詩賦 坐情春

欲盡花香滿衣巾 鳥空啼

ケイレイシヤキ多クテモスルスミシウホノテン

村嶺瘴来雲似墨愁暮天

洞庭春盡水如天 蝶怨風

廣武城邊逢暮春 汝陽歸客淚

沾巾暮春ノ頃故郷ハカヘ 落花寂々啼山

鳥揚柳青々渡水人 暮春ノ景

惜春△春の限 △夏り久 野宮大臣

東海もく霧くみそいとしむく

連晴ももあふまそ力やれ

能天もまよと晴むくも月御孤桐

春湊春のあけまうてまお不成

春のあけまうてまお不成

春のあけまうてまお不成

春のあけまうてまお不成

春のあけまうてまお不成

春のあけまうてまお不成

春のあけまうてまお不成

あつたまのともをあり

哥 新古今

寂蓮

ふきとりの春の落のまはるるに
ふきとりの春の落のまはるるに

三月盡

三月晦日といふ
一日ふかださる

哥 哥苑抄

行尊

あつたまのともをあり
あつたまのともをあり

夫木 唯残半日春 千里

一年いまふと二ふもさういふ
さういふと二ふもさういふ

日 雨処春光同日盡 千里

春のまはるるまはるる
まはるるまはるる

詞 春の初へ。夕暮ぬはるるま
夕暮ぬはるるま

花とさうらう。夕暮ぬはるるま
夕暮ぬはるるま

つ。たのむげま。夕暮ぬはるるま
夕暮ぬはるるま

花のまはるるまはるるま
まはるるまはるるま

つ。たのむげま。夕暮ぬはるるま
夕暮ぬはるるま

連 夕暮ぬはるるまはるるま
まはるるまはるるま

非 雨のまはるるまはるるま
まはるるまはるるま

考ふまはるるまはるるま
まはるるまはるるま

おのまはるるまはるるま
まはるるまはるるま

詩 三月盡之詞

唐 韓偓

樹頭初日照 西簷樹底 鶯花夜

雨沾 朝日ハ花ニウツロヒノキヲテ

ルホヒシケレシキ 外院池亭 聞動鎖

後堂欄檻 見垂簾 外ノ戸ヲアケ

来ル人ノアルニヨリ 女中 柙腰入

戸風斜倚 榆英堆墻 水平淹 柳

ノ水ヲ、ヒ風ニナヒク 把酒送春 惆

悵在季年 三月病 蹶々 今ヤ三

ゴリヲラシムデ 酒宴ヲツナヘル中ニ

モ物ワビシク 心ホソキハ三年ヤニツ

ツケ今春モクルレドモ 病

愈ガルゾモノイトハシキト

詩 全

今孤楚

小苑鶯歌歇長門蝶舞多鶯モナキヤ

蝶ノトビカフ時ハ春ステニ暮ルニ至リ長門宮モ物サビシキゾ

眼看春又去翠輦不曾過行幸

テク御クルメノトホリスグルコモナク今年ノ春モアダニクレユケドモ行幸

ノサタモナク君ノメグミヲウケヌヲナゲキタルナリ

詩 全

賈島

三月正當三十日風光別我苦セイタマフタクカク

吟身キンシ三月晦日ナレバ今夜バカ共三月晦日ナレバ今夜バカ共

君今夜不須眠未到曉鐘猶是君今夜不須眠未到曉鐘猶是

春春余リ名残ヲシケバ今夜ハ眠余リ名残ヲシケバ今夜ハ眠

忘忘霜霜立春の節より八十八夜立春の節より八十八夜

草木 此部ハ三月一ヶ月の

花 古昔ハ梅小定る一枝開天下

花花皆春をどく詩は用とも梅の

花花とつる○中せう梅の正花と

つる○一説は和哥よハ花と

つるハ往昔より櫻の事とつる

櫻櫻夢見草△あぶら草△吉野草

櫻櫻かぎ草△曙草 尋見草

中華にて此花を櫻木と

つるものあきとも楮柿の類

ハして賞翫するものありあつど

或ハ櫻桃を以てさくらハあつど

どと本草と考ふるハ櫻桃ハ今の

ゆすり梅さう朝鮮ハ此花を

ハと中古来聘の時此花諸方ハ

多くあると見てウの聘使の朝鮮

人等甚でこれを愛翫せり海棠

の異類ハしてつるハ望土のたのこ

その花の美なる事本朝の外小た
るあなさと見へり此事唐人
にも能く知る宋景濂が詩
あり末に載と

○夫木 野外花 家隆

桜うら志ぢりめげえんうしたりの
時りりのかゝる美むもうつらぬ

同 庭上櫻 仲正

かゝくや約もかきぬあなよの
危もせみさくうんさくうらふ

詞白 文 咲らる。袖ふ○雲花ふ

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

花は雨花と重む花の 鶯 春づかふ鶯は梅

○哥連俳句法

○前ふりつとく花と櫻と同
様の事ふれども和哥は花の
題小櫻と詠とてもくじとて
櫻の題よりさうとよむ事し

○連俳より子細あつて櫻乃
句の花の句ふありさうに附

句ふも花よさうと付る事
いあれども櫻の句小花のつて

付さるゝ但し櫻を以て正花と
さる事格外の傳あり

終焉。む。日月 花よりつらふ風

のうらあ。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

むとああり。そことあく 朝 期あをむむ

○非諧正花非正花大畧

○正花本植物春小成分三句まり

△花の遊△花の浪△花の雪

△花吹雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

哥 文應百首

為家

うつらうら神のまじろの八を梅
よきの日とけしあふりしはな

犬櫻



木葉常の櫻と同
小花穂とみす山邊

狂 約きて本れ下陰い盗人の
利心もとれた大梅りか 貞宿

渦櫻

袖中抄云唐鞆の雲珠似り

哥 夫木 定家

そやけきさのゆきさるうづさう
くさぬのふよさけるるるじ

樺櫻



花樺茶色之故号く
又別々を本あり

是ハ檜物ユ多く用るりのうり
哥 新六帖 為家

梓弓矢射の里のかを梅
花ふのそのふさるるる

遅櫻



色少紅く諸花不
後と音葉隠れ

咲く四月新樹ふと合と事あり
草菴 頃阿

なうとせにををいそるい
おくれて咲る花と見すや

連 りぬむと合と咲るは梅
非 かぐぬぐでてもあし遅ざう累

烏帽子櫻

非 花がめにはえ鳥
帽子さうく氷如水

小櫻



花うす色密あうて
咲鎧の小櫻威と

いふ物此花乃色ふかござりとく
非 小梅の花咲あや具足親直寛

伊勢櫻



花濃紫色小
赤一花瓣の

中の元白いせと名はれ
非 依保妃と名ええん子梅 重以

普賢象櫻



花千瓣
淡色と

帯の花中二の細葉出家鼻のじ
非 鼻を以て名ええん子梅 重

塩竈櫻

狂 塩竈の海舟舟
梅初るは梅小せん 三哲

緋櫻

小輪して莖長く其葉甚ど
赤し新撰六帖 光俊

夕附日福ふ雲やほろつらん
さる根よまろひざらうの花

楊貴妃櫻



重辨はて
中輪あり

狂楊貴妃の花のうやはほほく
天のふりたる梅をかりり負清聖

右の外重流櫻△江戸櫻△西行櫻
△虎尾櫻△浅黄櫻△雲井櫻△右明

櫻△滝櫻△委しくの本篇博物
釜小名木并小花形くじしくのを

花笠

花かさとて恙で多
似合ん人の世 其角

花の雪

大伴のむさうづむ
らん花の雪 全

花見酒

佳利ねくさう
や花あふこそ 全

右のつぎも花ふすそふらあり
委しく世に下り の所あり

尋花

新千載 津守国助
はふふとらうつかりまうら山

梅を成るひてゆくね目せられ
家集 泊舟尋花 西行

漕出てたうの沖みえまてせバ
まうこひつもさうねまう雲

花盛

徒然草に立春の後七十
五日と期とひらうし右

れも今の甚早一口の二丁め五
丁め小花盛の時をいらす

永徳百首

為重

あそりの花の日数あり

非 志記ある人の回分や花盛の桃室

徹とた又あけけりささうり波支

大和路の種をわらも花盛淡々

山や花垣根くの酒もや 亀洞

狂 寄舞の扇乃風もやてい

今とさうり花見酒よは宗恒

落花

。山里深山をく人稀き
處花の落るまじき躰云

家集

西行

本れりしの様子をすれかき此心
花のふきをぬくとさびる春風

夫木 水辺落花 鎌倉右大臣

橘むらうのうらむの夜の夜乃

おちる月長乃かまれば川風

詞ちりひさうら。花ちり。同く今も

禁の心実は春風。春は雪。花乃稀

入相。浪の心。波らう。ちりうら。花

傍。空ちりあわ。あうま。くらうら

花をぬれ。ちりま。あうら。あ

冬。あうら。福。吹。あうら。あ

心。く。意。あうら。あうら。あ

連。ちり。あうら。あうら。あ

非。あうら。あうら。あうら。あ

狂。あうら。あうら。あうら。あ

あうら。あうら。あうら。あ

落花之詞

唐 雍陶

勿怪頻過有酒家多情長是惜

年華 年月ノハヤクウツルヲオシムソ

春風堪賞還堪恨 春風ヲ賞美

又花ノチルヲ見 終見開花又落

花 昨日ノ開花ケフハ落花トナルヲ

今日ハ老妻トナル 世ソカシ

詩 全

明 丘雲霄

昨日看花花滿枝今朝爛熳點

清池 昨日ハ花枝ニ滿テ有ニガ夜

浮へ 無情莫抱東風恨作意開

時是謝時 花ノチルモ無情ノ至リ

テ恨ルヲモナシ初メ開ケル

詩 落花五字對句

煙銷垂柳弱 待月水流急

桃ノ風雪ヲ見テ春ノ去ルヲ惜メバ愁浅カラズ

殘花

春はらう残る花といふ
夫木 入道太政大臣

まよとあふ名残はむもさくらぬ
とよりられちの入あひれそ

詞 △名残の花 △青葉乃花
梢ふのころ。凡より後たづのころ

詩 殘花之詞

唐 崔惠童

一月主人笑幾回相逢相值且

街杯コト一月ノ中何ホドカアルカ
ヤウニ偶叅會シタ時話チヨコ
リテウサヲ志シ酒ヲ吞レヨ

色如流水今日殘花昨日開光陰

ノウツリカハルハ水ノ流レテトビ
ルコナキガゴトク昨日ノ花サクリ

ハ今日ハヤ落キル然レバ酒ヲ
ミタノシムテスゴサレヨトイフ

詩 殘花五字對句

枝上三分落 山齋鳴過雨

シシヤウ フンオチ ササイナリクハソニ
ハナナリカニル アメノラト

園中一寸深澗對落殘花

詩 同七字對句

好鳥鳴春歌後院 看殘花

コウテウナクハルニカゴノイ
トリガサハツル ミルサニクハ

飛花送酒舞前筵 眼偏明

ヒクハオクルサケラブセシ
ハナニユエニノザハケル ナコヒトニキ

短砌雨餘芳艸合 照殘花

タンセイウヨハウサウカウシ
シヤウテイフウテウラククハソ
イロナヲフカシ

海棠

△かろき △移るる花
異名 花仙の唐小もえり

海外より来る花ゆへ海棠と名づく

非 海棠の花のうつやおるる月其角

詩 海棠之詞 明 張新

雨滋霞襯入朱顏 二雨ニヒトシホ
蒼ノ色香ヲ

月下疑後姑射

ニタトヘタリ

還マカ 山ノ仙境ニ似タリ 最モトモ

是春工多巧思著將色在淺深ハハ

間マ 春ノ造化ノタクニ種々ノ妙ミ

詩 海棠五字對句 同上

蜀彩淡搖拽弱質不禁露シヨクサイ

吳粧低怨思幽懷欲訴風コサウ

望中落日青絲騎箔外風バウチウ

夢裏東風瓊樹枝舞蝶飛ムリトウ

海棠 花中仙 王禹稱。花譜クハナウクセン

故事 花中ノ仙ト 恨無香 冷齋夜ウラムナキヲカ

楚淵材ト云人ノ詞ニ吾平ス楚淵材ト云人ノ詞ニ吾平

生恨ルコナシ但シ恨メシキコト生恨ルコナシ但シ恨メシキコト

五ツアリ一ニハ鱗魚餅キモノ五ツアリ一ニハ鱗魚餅キモノ

ナレ尻骨多シニニハ金橘モヨナレ尻骨多シニニハ金橘モヨ

キモノナレ尻酸キヲ疵トスニニキモノナレ尻酸キヲ疵トスニニ

ハ萼菜賞翫ナルモノナレドモハ萼菜賞翫ナルモノナレドモ

性冷ナリ四ニハ海棠美花ナレ性冷ナリ四ニハ海棠美花ナレ

ドモ香ヒナキヲ如何ン五ニハドモ香ヒナキヲ如何ン五ニハ

我が嬪子詩ヲ作ルコト能ハサル我が嬪子詩ヲ作ルコト能ハサル

コノ五ノ事吾ガ恨トイヘリコノ五ノ事吾ガ恨トイヘリ

睡花 唐の玄宗皇帝大真妃睡花 唐の玄宗皇帝大真妃

と叫ひぬふ妃新おれさそと叫ひぬふ妃新おれさそ

来マシ姿と見玉ハ海棠の睡来マシ姿と見玉ハ海棠の睡

どこのささり名づもささりどこのささり名づもささり

白輪海棠花 白く白輪海棠花 白く

桃花 三干代草△御酒古草桃花 三干代草△御酒古草

異名 洞中仙 武陵花異名 洞中仙 武陵花

異 姐挑助嬌 一縣花異 姐挑助嬌 一縣花

異 仙木 蟠桃 引客 毛桃花異 仙木 蟠桃 引客 毛桃花

異 三倫 五渡 阿陽花 碧石挑異 三倫 五渡 阿陽花 碧石挑

異 招挑 柳郎花 陌上花 桃林異 招挑 柳郎花 陌上花 桃林

桃林

桃林

桃林

桃林

桃林

桃林

桃林

桃林

⑤ 夫木遙見桃花

俊頼

誰り又そそあぶらん山づみの
そのよ乃桃れ花のをせめを

⑥ 藏玉 三千代草

々々々々々々々々々々々々々々々々
さるものまじあまのいさか

詞 春風うめりうえまは五圍

生の桃。三子代。夕日。さそめあ

き。鞍る山。天の川。ま月。碎。果垣

悠。留。系。二日の系。はやの彩。瑞。

唐古孫。枝よりそ。遠山。霞

⑦ 連。花。今日。是。開。く。めり。雲。の。桃

未。芽。世。は。や。う。め。の。雲。れ。桃。紹。巴

⑧ 非。花。傍。の。桃。や。ま。花。奴。け。櫻。圃。其。角

雁。小。木。て。ま。ま。そ。さ。る。山。嶺。小。移。行

詩 桃之詞

唐李嶠

獨有成蹊處。穠華發井傍。清水

二桃華。アリ人ヲ不召トイヘトモ人

巷ヲ慕フテ来リ自ラ蹊テキル

山風凝笑臉。朝露涼啼粧。桃花

ハ美

人ニ似タリ風ニ逆ハ笑フ如ク
シ露ヲ受レバ涕ニ似タリ 隱士

顏。應。改。仙。人。路。漸。長。隱者モ桃巷

ヲ改テ喜ビ咲ヒ仙人モ雷ヲ還欣上

リ見テ路ヲ行クヲソシ

林苑千歳奉君王。以テ天子ノ壽

ヲ祝スルナリ

詩

唐白敏中

千朶穠芳倚樹斜。一枝枝綴乱

紅霞。桃樹ノ千朶斜ニノビテ花

ケルヲ緋ノ。憑君莫厭臨風看占

斷春光。是此花。春風ニ乘ノ桃

ナシ春光ハ桃巷ヨリ外ニハナシ

詩 桃五字對句

種竹交加翠。松葉疎開徑

植桃爛侵紅。桃花密映津

詩 同七字對句

詩 礎

桃花氣暖眼自醉種桃年

春渚日落夢相牽深淺粧

五夜漏聲催曉箭紅欲然

九重春色醉仙桃滿澗香

桃ノ 漢書ニ載ス武

帝ノ時一足ノ青

鳥来リテ帝ノ前ニ止ル東方

朔ガ云ク頃テ西王母来ルベシ

トテ身ヲカクス少ラクシテ

王母来リテ桃ヲ奉ル此桃

三千年ニ度實ノル仙家ノ

桃ナリ屏風ノ後ニカクレタル

豎子此桃ヲ三度偷ミ食ヘ

リト奏シケルコレニヨリテ世

ニ東方朔ハ九千歳ト云ヒ習セリ桃

五木ノ精ナル故ニ邪氣ヲ去百鬼ヲ製

桃之故事

天台山

漢ノ代ニ劉阮ト云者天台山ニ入

テ茶ヲ採ル路ニフミヨヒテ

山ノ頭ヲ見レハ桃樹ノアリケ

レハ取ラントシテ水ノ深サ四

尺ハカリナル所ヲワタリ又

一ツノ山ヲ越ケル時二人ノ女

ヲ見ル容顏極メテ妙ナルガ

劉阮ガ姓名ヲ呼ビカケル

下地ヨリ相識レルゴトシ

武陵源 武陵ト云所ニ魚

ヲ捕ル漁夫ア

或ル大家ニ男女有テ彼ノ

漁父ニ食ヲ與ヘ馳走シテ

云フ我等ハ秦ノ世ノ乱ヲ

避ケテ妻子ヲツレテ爰ニカ

クルツレヨリシテ世間ニ出子

ハ年數モ覺ヘズサルホドニツ

レヨリ何代ヲ歴タルゴト問
 フ秦ヨリ魏ニ移リ晋ニ代
 リテ遙カニ年代久シキコト
 ナレバ漁者モ大ニ心アヤシニ
 歸リテ此由ヲ太守ヘ申上
 ルニツキ太守ヨリ漁者ニ
 ヲツヘテカノ前ノ大家ノア
 リシトコロヘユキ再ビ尋子サ
 セラレケレドモ其アルトコロヲ
 知ラズ尋テ路ニフミマヨヒ
 辛フシテ空シ

玄都觀

クカヘリシト有
 邛崃錫ガ詩アリテ玄都觀
 ニ桃千樹栽シトイヘリ

桃 源平志云桃白
 品 赤とび入輪ちぐみ

残雪桃白
 八重大輪

緋桃八重
 早咲いふたれて

詩 緋桃之詞

短墻荒圃四無隣 烈火緋桃

照地春 古城ノ荒圃野中ニア
 リ桃蒼赤色火ノ烈ガ

コト 坐久好風休掩袂 夜來微

雨已沾巾 桃葉受風美人ノ袂
 テ美人ノ涕ニ似タリ夜來雨降

似有微詞動絳唇 桃花ノ礼容
 似タリ 敢同俗態期青眼

郷井念此時何必見秦人 終日
 見テ

李花 異名 東苑 道傍
 和名 ひめつぎを花 藏玉ニ

新撰帖 為家
 まきぐそふ雪く刃るをよん娘乃
 垣棟のさより花咲かたり

詞 斤山陰山岑の候風もそひぬ

雪のさかきく雪の雪を見ふる

詩 李之詞

唐太宗

王御流桂園成蹊正可尋日夜

谷道ヲワケウ鶯啼密葉外蝶戲

晚花心鶯ハ葉ガクレニナキ

李往獨來教愁情相與懸李若

道ヲイク度モメグリテ自明無

月夜強笑欲風天ヤミナレドモ

テアカレ心ヲ取ナシ自シ笑フ

減粉與園籜分香沾渚蓮徐

妃久已嫁猶自玉為鈿美人ニ

詩 李五字對句 同上

園裡送明月葉暗青房脫

林頭宿白雲花明玉井春

詩 李七字對句 詩破

近紅暮看失燕脂自無言

遠白霄明雪色奇李花香

石筍街中却歸太花落時

果園坊裡為求來白玉堆

楊梅花花ハ早く花咲葉

実のうづ松りくしつへ木立

のびやうさうざ實も酸

○実の大イさうやど味うひ

もよりゝゑくび植

杏花 新撰六帖 衣笠内大臣

はて白ひそあつくん月の中

春園あゝぬうりりの花

詞 しのぞをのぬし。白ひ初

よのが志あゝぬ。中ぬとたわゝぬ

非（俳）まどろい何れあんどれたの之貞徳

詩 杏之詞

唐 温憲

團雪上晴梢紅明映碧空白雪

ノ梢ニカ、リ杏苞（杏）店香風起夜

ノ色天ニ映ス（杏）村白雨休朝

夜風ニナツテ雨ヤミ今朝ニ（杏）靜落

至テ見レハ一村雪ト成レリ（杏）

猶和蒂繁開正蔽條（杏）夜雪杏

テ花蒂ニ竝ビ恰モ杏花ノ（杏）淡然間

繁ク開テ條ヲ蔽フガ如シ（杏）

賞久無以那嬌饒（杏）靜ニ居テ杏

賞玩スレ厄飽キ足ル（杏）ニテハナシ

詩 全 薛能

手中移得近青樓（杏）枝ヲ折テ寄

活色生香第一流（杏）杏花ノ色白ク

誰知艷性終相負（杏）乱向春風笑

不休（杏）杏花美ナリトイヘ厄媛ニ近

ツレハ艷色相子タム（杏）ヤラ風カフケ

暖酷松葉嬾（杏）晩色連荒輒

寒粥杏花香（杏）低陰覆樹碑

詩 杏五字對句 同上

忽憶華時頻銘（杏）酹杏間遙

却尋醉處重徘徊（杏）湿胭脂

寂々孤鶯啼杏園（杏）獨含晴

寥々一犬吠桃源（杏）已續翻

杏之 碎錦坊（杏）斐晋公午橋ト云

所ノ別業ニ杏百

株ヲ植テ碎錦（杏）坊ト名ツ（杏）葡萄花

林檎花（杏）名異 文林郎 東花（杏）大小ニ種あり

梨花

異名 清艶 淡妝 玉骨

種類 △棠梨花 野山に生る

浦梨の花 あいの浦とて伊勢の名所ありよて
あいのうららふしよもいも

妻は花 花はけりまはり三秋の

○夫木

為家

少くもつる侍とてとれさあ
枝みわかれり山梨乃りさる

詞務くふえさぬるに自ふた
もまゝに心彩の妻まゝ。あろま

生けまゝ。書まゝ。梨空志
る花をば。風かよ。咲そよ。あろま

○連 雨や夕行ひるの朔あつ月相
○俳 梨花は木ぬをいぬる嵐式

○梨の花うらに尼は念併まて言水
あつたのふとハ梨花花多る鬼貫

○詩

梨花之詞

劉商

露冕行春向若耶野人懷惠欲

○移家 若耶ハ公儀御用ノ梨多シ
官人春行テ梨花ノ豊年

ヲ見ル民家尤ウルヲヘリ近辺ノ野
人其恩惠ヲ思フテ家ヲ移シテ

来ント 東風二月淮陰郡唯見棠

李一樹花 淮陰ノ辺ハ古ヨリ梨樹
多シ十本アル家ハ大名

トヒトシト
云傳ヘリ

○詩

全

丘為

冷艶全欺雪餘香乍入衣 梨花
白ク

ウルハンキ「白雪ヲ欺テホコルニ似タ
リ其香氣餘分ニ多シテ人ノ衣

服ニウ 春風且無定吹向玉階

○飛 梨花ガ春風ニ吹カレテ玉階ニ
向フテ飛ブト云フヲ以テ新臣

魚功ニノ恩惠ヲ蒙マリ
天子ニ近クト云ニ喻テ云リ

木瓜花 非 木瓜あざみ花

○狂 惟小多秋あて木瓜のささる
蝶鼓

○木蓮花 非 け文と危の好

木蓮花 木蓮花を悟井

美溪ウツリテヨシ

詩 藤花五字對句

野衣裁薜荔 松石偏空古

山酒醉藤花 藤花不計年

詩 全七字對句

詩礎

長蔓纏來山徑樹 碧侵衣

金花拂盡石橋苔 花無枝

仙人碁局埋幽艸 留美人

閑士禪扉閉古藤 院隔橋

妙術

藤の花長く見事小閑法

藤の根へ酒とかけ或ひは酒の糟と入るへは藤能くよと花

長く美しく咲たり 扱花咲て

後英の下へ盃小酒を入三寸程

あいでとあけて次第に盃を

ささるるる花長く見事咲

月季花 日月紅 不断たへと

より長春の名あり 然まどを

春りとも花多し 殊小春と

詩 月季花之詞 宋 韓琦

牡丹殊絶委春风 風離菊蕭疎

怨晚叢 牡丹ノ春風ニナヒキ 何似

此花栄艶足四時 常放淺深紅

牡丹ト菊トハ美ナリトイヘトモ月

季花ノ四季ニ咲テモ、イロクレナイ

櫻長春 木ハセウヒ花ハ八重

以赤 咲出ハ白く次第



二重本ハ内旁



石楠花 唐人の詩小もあう 葉はらんらんげ母

似くう (詞) 霞山。か入峯。小名。 飯山。篠分る。乃山人。大峯。役の

仙のくめつ。のれう。よそ。へ。ま。る。の。え 仙のん乃。食。と。り。の。さ。り。

非 山京のたう。こ。を。す。し。福。む。頼。高 瑞香。春。是。と。う。木

高。二。四。尺。花。丁。香。の。如。く。あ。て 紫。既。小。開。け。バ。淡。紫。と。な。り

非 木。登。る。核。の。交。る。沉。丁。花。風。光 狂。竹。垣。を。度。の。こ。め。は。せ。り。そ

白。ひ。を。と。む。り 山吹 順。の。和。名

沉。丁。花。未。得 抄。小。款。冬 此。の。字。と。書。く。朗。詠。集。に。公。任

以。て。見。る。時。ハ。款。冬。ハ。ふ。と。の。臺 郷。も。此。字。と。用。ひ。給。ふ。本。朝。以。て

の。事。之。正。字。ハ。棟。棠。異。名。 醜。花。玉。蕊。銀。葩。春。紀。念。草。鏡

草。面。影。草。菊。の。花。ハ。黄。色。と 本。色。と。山。吹。の。花。ハ。白。と。正

色。と。す。良。峯。の。宗。貞。ハ。山。吹。乃 花。笑。此。歌。に。よ。り。て。山。吹。を。よ

み。合。せ。た。り。黄。色。の。事。な。り 枝。う。ち。と。な。れ。し。あ。さ。を。ち。り。て

詞。笑。ち。れ。八。ま。い。あ。さ。の。ま。い 枝。川。原。の。山。吹。新。う。つ。ら。志。の。枝

と。あ。り。波。不。ち。う。ち。井。子。の。池。 池。津。の。玉。ち。と。か。る。池。津。若。宿

此。後。池。池。の。山。吹。池。の。志。宿。此。の。花 里。里。の。山。吹。山。吹。の。志。宿。此。の。花

露。く。よ。う。と。あ。さ。の。ま。い。山。吹。の。志。宿 露。く。よ。う。と。あ。さ。の。ま。い。山。吹。の。志。宿

の。ほ。も。花。笑。れ。あ。り。た。る。花。の

東菊 花菊小似て淡紫色 栞花 花梅小似て

櫻草 種類数多あり  鞍馬さくら草

濃紫白抽源 濃紫 旌節草 九輪草 氏薄紫

海老根 化偷州 山宇波良

荒世伊登宇花 花こころ

丁子草花 葉柳小似て花丁子のごとく浅葱色

仙臺萩 萩小似て花黄之 首宿

華鬘草 花形之ニと花

碎米薺 蓮華花五形 俗小

母子草 鼠麴 米麴 鼠耳 茸母 黄蒿 香茅

無心草 佛耳草 非 良貞

妙術 治痰嗽術 母子草花

小粉團花 花の形粉團花不等

馬酔木花 三才圖會云能繁茂と

蘇枋花 紫荊花の赤色と染る木とい別

荷花紫艸 非 根とみれば

白茅 茅花 花の形白又

哥 新乃のへら 芝生 つむぎ 根と 葉と

うみひ子 もがみ はりのい せん 知家

詞 生の多うづよ流る。不ふ出。あは生

俳 迷ひ子のつごも拵て泣かたり 青瑛

芙蓉花。雞頭。雁頭。水落。葉

馬蘭。葉長サ三尺幅二三分花六

眉作花。形り眉拂ふ似たる故

名づく一説ハ鬼筋と云り

俳 老心も云拵てまの仇東起

○つぎみハ小薊大薊の二種ゆへ天竺を

又古書ハ美人艸の事ともいへども如

何とねも云ハ美人艸の事ハ四月に出

海金沙。紫はる。あまづ。いづく。

線づるといふ宿根より生とる

つづく草より莖甚とつ

董。苦董。苦葵。俗ハ相撲草と

いふ花ひくされいりあり

堀川百首。公實

ひくえいりいりか垣根いりふたり

はをまよりづるあたままのこりて

連つとくせすまのまのたを云省相

俳 老のげぬ娘の拵すまのたを云省相

甲なれを去らばさるる董亦如水

狂 うのくしひりりれをいりるらん

茶師の倉乃は不すまのたを云省相

金盞花。長春菊。花金紅色

棋檀花。木李。木梨。花五弁

黄精花。葉竹小似て尖らず花青

三月大根。楊花蘆服。春日

櫻桃。花梅のてくく少くして白

梅若葉。新小生。秦椒若葉

苜蓿 △藜藜何△若荷
在 かのささる二百三々や能

らん我らろ松で 三月菜 春時葉
を食入

若狐 葉の部 若葉 冷毒虫刺
とて付即堅

胡蔥 非あさつさともをころい
ささる白根を岩翁

櫻海苔 非花漬の嵐やとる
さうらのり 風鈴軒

茶摘 茶を採の時分早き時
味全うば遅さの神散ず

穀雨の前五日と以て上と後
五日と下と再五日又とれよ次く

終夜露よぬまでと上と
日中にと下と雨雨中にと

春雨集 曇るる雨降ぬる
梅尾山のま乃るを

非社に名月れとる茶つさ里

山畑の茶種 昔此製
有今無云

手始 茶つさ

綿時 八十八夜と五六日見か
けてまくと上時と

八十八夜と過やまく

下手次第不静なり一月も早

までもまくおそくえいさう人

てもまくすは ○白花のか

種 此月種を蒔べき

黍 薏苡 烏芋 豇豆 此月

菜豆 扁豆 赤小豆 刀豆 胡麻
薑 眉兒豆 黍 石竹 地黄 草

麻子 荆芥 香薷 茜 胡蘆

菊 蔓 粟 沢瀉 此月苗を仮りよ分ち 肥つち 移栽

仙蓼 芭蕉 秋海棠 芋 六角豆

橘 冬青 木槿 椿 是ら此月う

接木 紅福 柑 柚 香櫞 等清

明の前後小はごしては

生類

三月一ヶ月の諸の

生類をあるす

呼子鳥 古今三鳥のいふ

わしどたご深山よ鳴て物さびく

き鳥と心得てよむべし古今

の哥いよりておぼつうさくまこ

呼といふあふもよみつたる

夫木 赤人

我せととあじのふはよとと

君よびくせ衣はさけぬとと

日 曉呼子鳥 左京大夫

夜とのこみねさふとんをよとを

人もさくぬ志のく免のそ

夾々鶉 非 岳雨のぬま 弓

残る鶴 二月小引さくる鶴乃

此月もぐで残り居るこ

雲小入鳥 鳥沖雲とも云

鳥帰も同ド

事あり鶴雁鴨及びりう

くの鳥の古巢は帰て去の

心かり天津雁といへるもより取

あり雲よ入鳥の哥連俳と

三月盡古巢へ帰る心と結び侍る

津守國基

能名の階梯は入たり不三聲一音

りりやの輝さひらりれり糸が晋子

鷓鴣 和朝かほ渡り鳥あり背

小紫赤と交る羽あり

ひの前の白きも丸毛けり
 まりた所あり南方の國あり
 東南へとびて北西へとをさるる
 その声くやくくくるくゆへ名付と
 りり寒氣と嫌ふ鳥よて日行
 方へくと向ふてと霜露を畏
 るるゆへ朝の日出る内と夕暮
 がよの出ること稀なりとく

夜分ふと時ハ樹の葉を背上に
 覆ふて飛は雀豹が古今注見あり

○非 ちやこふはあてがふ鳥や白飛

詩 鵙鳩之詞

鄭谷

暖戯烜蕪錦翼奔 鵙鳩ハ寒ヲ

テ暖ナル日野辺ニタハフレ翼ノ品

ウツクシキコト錦ノゴトシト品

流應得近山 雞ニヤコノ風流ウ

雞ノスガタ 雨昏青州湖邊過 雨

ニチカシ

ラントスルトキハ青草湖ト云フニツ

ウミノ辺ヲ飛スギテ寒ヲサケル

花落黃陵廟裏啼 三月ノ末ニ廟

ノ裏ニテナク

コレ春ノ終ルニルシナリ黃陵

ト出スハ青草ノ對ニスルゾ 遊子

乍聞征袖湿佳人 纔唱翠眉低

鄭谷征役ヲ蒙リテ旅遊ノ身

ナバ鵙鳩ノ啼ヲ聞テ古郷ヲ

思ヒカナシメナシダ衣ヲウルホセリ

美人ノ哥モ自然ト眉ヲヒソメテ

モノカナシ 相呼相喚湘江曲苦

キテイナリ

竹叢深春日西 湖水ノホトリ竹

日ノコロ啼キサケブヲキケ

バイヨクモノカナシキトシ

蛤 今月食用可シ△蛤ウミノ

貝ありとて其のよきなり西行

○非 丹波山の栗の秋のあま

○非 雀の春の櫻貝 非 山傷や

くらさく 櫻貝 春跡てふ

貝長吉 櫻魚 川魚 櫻魚

① 非筑波くまぬかろう 櫻鯛 櫻棘
てやさんく魚東起

② 夫木 橘鯛花の名るやち柳の
くはたきてやんれらるらん公朝

③ 運 見ごころのたぐはれらさく鯛永澄
非釣竿てめらるやぬまは橋がり鳩溪

④ 狂 一のけ菊のほ香じ秋のあきど
まの海をふくは存まの鯛重頼

柳鮓 形柳葉似らる故名づく又
時の景物と賞美の詞共云

柳鰈 俗牛の舌 難女 溪鱸
若鮎 小鮎 汲鮎

⑤ 新六 山川のそとれ本法のかまふ
恙鮎つるもさふい考しは家良

⑥ 非 らむこいふ鮎や 青饅 木芽と
芳野のつる鮎常信 旅智也 膾炙

上梁 梁の奥と取具へ上り梁の
鮎の上と逐下して取え

⑦ 夫木 せれたがら田上川のたぐりや
お逢くくあねをぞうづら 為家

必用

此間ハ三月ノ月必用ノ
事又養生ノ法等トノ事

破軍

夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
午の方	未の方	申の方
朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
酉の方	戌の方	亥の方
昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
子の方	丑の方	寅の方
暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
卯の方	辰の方	巳の方

時刻

万事知の日知の刻と
用へが守めし月建あり

出行作事

この北の方
いひらいて万

事吉之此月天
道北の行が故也

樂事

山野の
道遙

して花下の遊ぶと此月おろくは
其外遊事筆紙小尽し一がこり

天氣

日和を見る小西北の方の
山とるるべし四方曇りて

も西北の山の根と死く時ハ雨
やげた人山の根と死くも西北の雲

東南へ行日和睦ても曇りても
 南風吹出せば雨とあり○南風或は
 東南より大風吹出せば曇らる寸
 とても頻て雨とあり○暴水出ま
 今年中風雨多し是と桃花水と云
 ○暖ふるべし比寒くさる雨とあり
 占候 日蝕もとが大水とま
 甲寅甲申乙卯己丑辛
 寅壬己以上の日以雨ふれば米價
 貴し○辰の日雨ふれば百虫生ど
 ○上半月雨あまば養生 此月
 魚多く捕まると
 臟氣伏し火壯水死鹹と食し
 肝の臟と助くば發泄くは
 西北の風ふあまらるべくは湿地小居る
 ことくあくれ 治中暑 今月辰の日縮
 の袋よりどんの粉を合せて風の
 とく所は掛け置と夏暑氣
 あらる時水はやくのへ
 て服とべし即ち浴と

三月飲食禁物
 三月飲食禁物 料五献立

禁物 小蒜 雞卵 鳥獸の五臟
 物 物のらつとるや 非此月食す
 べくは熱病好 今月中は其を
 を發せとるや 物と食と可守

料理 汁 大椎茸 切 ぬき ぬき
 塩がも すすきの 若やうり
 大根やうり

清汁 大根やうり 白が大ん
 葉せうが 生さの葉せうが
 生さの葉せうが

魚 鱈 赤貝 大ん 白が大ん
 葉せうが 生さの葉せうが
 生さの葉せうが

差味 志もやうだい 海苔やあん
 志もやうだい 海苔やあん

葉せうが 生さの葉せうが
 生さの葉せうが

葉せうが 生さの葉せうが
 生さの葉せうが

差味 志もやうだい 海苔やあん
 志もやうだい 海苔やあん

煮物

竹のこ 梅干

長いも 竹のこ

さけの皮

ひづりごぼう 推草 いせあび

赤貝 長いも 竹のこ

和會

物 青あへ

田つくり

山椒

吸物

たまご じり

汁

小豆び

進精

汁

清汁

山の辛かぶ 漬松

膾

大らん白が

テ大らん

酢

味い

差味

あび

ゆて

煮物

竹のこ 梅干

葉つと

新芝

和會

物

くこ

ゆりね

鳥

魚

ます

青物

松菜

三月用意の品 花柚 萱草 水々々

蓋屋

菊の實うん蘭のおほいを

とり去るべし

辟鼠術

かのへ午

の日鼠の尾を斬て血をとり
屋梁やぐらにぬれし永く鼠来きらざる

妙術

辟井邊百虫法夜
分雞鳴く時黍とと炊

と其釜の湯を以て飯を入り
器の置所おき麩も等と井のやう

かてあまひく洗へば鱗百虫の類
井の近所あまへ近づくとる

極て驗あり

絶蟻蚰法

螺螄らぎ

取り水小浸し置節ふ入日其
水と墻壁かきよそふば長く蟻

蚰らぎとらぎ

白髪去術

三月八日

十日十三日此日早朝あけあけて
東の方ふひうひて白髪あかとぬ

くぬし跡あとより生へる髪あか悉く
黒くくろありあり尤若若と人乃白

髪をとりこと
なかりと妙あり

三月之部終



